研究ノート

戦争論研究序説（六）

植村秀樹

一　問題意識
二　クラウゼヴィッツ『戦争論』の刊行と翻訳
三　『戦争論』の序文類
四　詩人ハイネの見たプロイセン・ドイツ
五　ナポレオンの支配とプロイセン改革
六　軍制改革とクラウゼヴィッツ
七　「戦争は他の手段による政治の継続」（一）
八　クラウゼヴィッツと哲学（一）

以上、第十八巻第二号（二〇一九年二月）
以上、第十九巻第一号（二〇一九年九月）

九　リデルハートの「亡霊」
十　レイモン・アロンと『戦争論』
十一　「亡霊」の系譜（一）
十二　「亡霊」の系譜（二）
十三　「亡霊」の正体
十四　クラウゼヴィッツと哲学（二）
十五　カントの時代とその哲学
十六　「ちんぷんかんぷん」
十七　理性批判の哲学
十八　超越論的弁証論
十九　「法の精神」の歴史社会学
二十　「法の精神」の政治哲学
二十一　クラウゼヴィッツと哲学（三）

以上、第十九巻第二号（二〇二〇年二月）

以上、第二十巻第一号（二〇二〇年九月）

以上、第二十巻第二号（二〇二一年二月）

二十二　『戦争論』第一部第一章

『戦争論』を読む準備はとりあえず済ませたものとして、ここからいよいよ『戦争論』の本文に入っていく。クラウゼヴィッツ自身が唯一、完成させたと述べているのが第一部第一章「戦争とは何であるか？」である。

したがってここにはクラウゼヴィッツの問題意識や方法論も含め、クラウゼヴィッツ自身が辿り着いたものが余すところなく述べられていると考えられる。カントやモンテスキューなど、クラウゼヴィッツに影響を与えたと思われる先人の業績を念頭に置きつつ、この章を精読することが『戦争論』を理解する上で必要不可欠である。この章はすでに述べように二十八の節から成り、その表題を追っていくだけでも、クラウゼヴィッツの思考と論理を追うことができるかのようであるが、ここでは順を追って読んでいこう。[1]

「1　序論」で「個々の要素より始め、次いで部分ないし分節に及び、最後に全体の内的連関を考察する」と方針を述べるのに続き、「2　定義」では、戦争を「敵をしてわれらの意志に屈服せしめることを目的とする暴力行為」としていることをあらためて確認しておく。これに続けて「物理的暴力はあくまでも手段であって、敵にわれわれの意志を押しつけることが目的なのである」と、手段と目的との明確な区別がすでにここに登場する。その上で「手段としての軍事行動が、敵にわれわれの意志を押しつけるという戦争の終局的目的に取って代」わるという事態が「現状のようである」と、戦争における手段と目的との区別の難しさに注意を向けている。

戦争において、片方の暴力に対抗するために他方も暴力の度合いを高めることになるために、「両者の暴力行使は交互に増長して際限のないものとなる」。ただし、両者の間に力の均衡がある場合にのみ、暴力行使の「限界」がもたらされる。戦争とはそのようなものであるという。

> 粗暴さを忌み嫌うあまり戦争の本質を無視してしまうのは、無益な努力であるばかりでなく、まったくナンセンスな努力であるとさえ言っていいだろう。

このように、戦争において暴力が必然的にその度合いを高めていくことが「３　暴力の無制限な行使」で述べられる。こうした記述が、クラウゼヴィッツがこの表題のとおり「暴力の無制限な行使」を奨励したと誤解されることにつながるのであろう。しかし、決してそうではない。クラウゼヴィッツは「国家の内部および国家相互間の社会的状態」に注目する。これこそが「戦争の真の原因であり、これらによって戦争は制約されたり、縮小されたり、また緩和されたりもする」からである。戦争の与件としての社会状態にこそ注目しなければならないのである。この節の主題が最後にまとめられているので引用しておく。

> 戦争とは暴力行為のことであって、その暴力の行使には限界のあろうはずがない。一方が暴力を行使すれば他方も暴力でもって抵抗せざるを得ず、かくて両者の間に生ずる相互作用は概念上どうしても無制限なものにならざるを得ない、と。これが戦争についてわれわれの直面する第一の相互作用であり、第一の無制限性というものである（第一の相互作用）。

戦争とはこのような暴力行為であるが、その目標は「敵の抵抗力を粉砕すること」である。次の「４　目標は敵の抵抗力を粉砕することである」が端的にそれを物語っている。しかし、この目標――敵の武装解除ないし敵の粉砕――とはあくまで「軍事行動の目標」であって、戦争全体の目的ではない。この目標は「相闘う両者について等しく妥当するもの」であり、それ故に「再び相互作用が問題になってくる」。敵に打倒されるのではないかという恐怖によって「私はもはや私に行動の主人であるわけにはゆかず、私の行動は敵によって惹き起されるものとなる」。しかし、これは相手側にも等しく妥当するがゆえに相互作用がもたられる。これが第二の相互作用である。

「5　力の無制限の発揮」では、敵の抵抗力について考察する。敵の抵抗力を構成するのは「既存の諸手段の大小」、つまり主として軍事力の大きさと「意志力の強弱」の二つの要素である。これを測定ないし推測し、それに基づいてわが方に必要な力――当然、「手段」と「意志」の両方――が決まってくる。ここでもまた、「相互に登りつめてゆく新しい闘争が生まれ、理論上これは再び無制限なものとならざるを得ない」。この第三の相互作用もまた、無制限なものとなる。

ここまで三つの相互作用について述べてきた。その記述をその上っ面だけ眺めるならば、そのいずれについてもその作用は無制限なものになるとしている。しかしながら、注意深く読めばわかるように、いずれも概念上のことである。続く「6　現実における修正」でクラウゼヴィッツは言う。「人間悟性が単なる概念上の抽象的世界にとどまっている限り、無制限なものに至らずしてとどまるものではない」。人間は頭の中だけで考えを進めていけば「本来無制限なものにかかずらわる傾向を持つ」からである。こうして得られるものは「戦争の純粋概念」にすぎない。

戦争の純粋概念から出発して、戦争の目標およびそのために行使すべき手段の絶対基点を、それより演繹しようとすれば、当然われわれは不断の相互作用を通して極限点に到達せざるを得ないことになる。しかしこの極限点なるものは、論理的技巧に操られた観念の遊戯以上のものではない。

もし、「極限点」に到達することがあるとすれば、次の三つの条件が満たされる場合だという。

一、戦争が突如として起り、これに先立つ国家生活と何の関係もないまったく孤立した行動である場合。

二、戦争がただ一回限りの決戦から成っているか、あるいは一連の同時的決戦から成っている場合。
三、戦争が自己完結的なものであって、戦後政局の打算によって影響されるようなことのない場合。

このような「無制限な力の発揮」に拘泥していては、戦争論は「机上の空論にすぎずして現実世界に何ら寄与することのない」ものとなる。この三つのうち第一の条件は「7　戦争は孤立した行動ではない」で否定される。戦争において「相争う両者はそれぞれの相手に対して抽象的な人物ではない」からである。相手の状態や行動から自己の行動を決定するのであって、「厳密な観念を単純に演繹して己れの行動を決定するのでは決してないのである」。そして、「8　戦争は継続することのないただ一回限りの決戦ではない」で第二の条件を否定する。これは自ら幾度も戦場に赴いたのみならず、数多の戦争史を研究したクラウゼヴィッツの長きにわたる軍人生活により導かれた確信である。最後に第三の条件は、「9　戦争とその結果は絶対的なものではない」において、「一つの戦争の勝敗が仮に完全に決定してしまっても」、「その後の政治状勢のなかでその災難を逆用し、他日回復せんと期すもの」として否定される。結局のところ、「10　概念の無制限性と絶対性とに代って現実生活の蓋然性が問題になる」のである。戦争は「必ずしも力を無制限に発揮しようという傾向に傾くものではない」。争う当事者は「具体的な国家なり政府」であり、その行動を限界づけるものがある。

戦争当事者はそれぞれ敵の性格・設備・状態・諸関係等に基づき、蓋然性の法則に従って相手の行動を推測し、それに応じて自分の行動を決定するものである。

つまり、現実の戦争は、無条件にやみくもに力の極限点まで突き進むものではない。「蓋然性の法則」に基

づいて自己の行動を決定するがゆえに、「11　ここにおいて政治目的が再び立ち現われる」。戦争が「殲滅戦から武装せる睨み合いに至るまで、あらゆる軽重さまざまな戦争が起り得るわけ」は、偏に政治によるのであるが、しかし、まだ「12　軍事行動の停止は以上の論究によってはまだ説明されていない」。軍事行動の停止――裏を返せば停止を挟んで持続している――は、政治と深く関わりがある。「13　行動を停止せしめ得る原因はただ一つだけである。しかしてこの原因は常に一方の側にのみあるように見える」において、講和を締結するまでは戦争の原因は継続しているのであり、「両者とも行動するのにより都合のよい時期を待とうと欲する」ゆえの停止である。そうした停止があろうとも戦争は継続している。それでは、そのような停止は戦争においてどのような意味を持つのか。

現実の戦争においては、「行動停止の時間が全持続時間の大半を占めている」ことも決して珍しいことではない。それだからといって、「軍事行動の停止をもって戦争の本質に矛盾したものと見なすわけにはいかないのである」。そうした軍事行動の停止した時間も戦争中であることに変わりはない。相争ういずれか一方にとって時宜を得たと判断されれば、再び軍事行動、すなわち戦闘は開始される。これが「14　軍事行動はここに至って連続性を得、これはまた再び相互の行動を煽り立てることになる」という意味である。

次に、相争う両者の関係についての考察へと進める。ここまで「一方の最高司令官と他方の最高司令官との利害関係がまったく対立するものとして取り扱ってきた」ことは、取りも直さず「両者の間に両極性の関係があることを認めてきたことにほかならない」。この原理についての考察が「15　両極性の原理について」で行われる。両極性の原理とは何か。それは「同一の対象について積極的な面と消極的な面とが相互に正確に否定し合って」いることによって成り立つものである。両極性とは、「一つの事項に対するそれら二つの要素の関係にあるということである」。「16　攻撃と防禦とは異種のものであり、強弱を異にするものである故に、両

極性を適用することはできない」、「17　両極性の作用はしばしば攻撃が防禦よりも優れているがために消滅し、かくて軍事行動の停止が成立する」、「18　軍事行動停止の第二の理由は敵状を把握することの不完全さにある」の三節は、その表題が内容の要約を兼ねている。まさにモンテスキュー『法の精神』の記述スタイルを彷彿とさせる。そして、これらの論点は、第三部以降において詳細に論じられる。特に攻撃に対する防御の優位性は『戦争論』においてきわめて重要な論点である。

さて、「19　軍事行動の停止が重なるにつれ、戦争はますます絶対的なものから遠ざかり蓋然性の推測法に近づいてゆく」で再び、戦争の哲学的考察、そして戦争と政治との関係が取り上げられる。軍事行動が停止している時間も戦争が継続している時間であることはすでに見たとおりだが、その停止の時間が長引けば「敵情認識の誤謬を是正する可能性もそれだけ高まり、かくて戦争当事者は事態を大胆に推測することが可能となる」。さらにこれを子細に観察するならば、当事者が「観念的に無制限なものへと思考を働かせる代りに、むしろすべてのものを蓋然性と推測に基づいて考えるようになる」ことが見て取れる。実際の戦争では「蓋然性の推測によって決定」がなされるのである。そして、ここに戦争にもうひとつの要素である「賭け」が導入される。「20　これまでの叙述には戦争に賭の性質を与える偶然性への反省が欠けていた。しかも実際の戦争はこの性質を多分に担っているのである」、「21　戦争はつとに客観的性質上賭であるのみならず、また主観的性質上からも賭である」がそれである。戦争を戦争たらしめる要素としての偶然性を無視することはできず、また、先に見たように、敵情を正確に把握することがほとんど不可能であるために、戦争から賭けの要素を取り除くことは不可能であり、そうである以上、賭けとしての性質の考察もまた不可避となる。「戦争の主観的性質に、換言すれば戦争遂行上に必要な諸力に目を転ずれば、戦争が賭であることの様相はますます顕著となってくる」。戦争は危険を伴うものであり、それゆえに勇気も求められる。計算ずくで進められるものではない。

そこでクラウゼヴィッツは次のように結論づける。

元来絶対的なものとして扱われている所謂数学的なものは兵学上さして重要な根拠となるものではなく、戦争には初めから可能性、蓋然性、幸不幸、といった賭的性質が混入しているものである。

クラウゼヴィッツはこうした戦争の性質に関する分析について、「22　戦争の以上のような性質は、一般に人心にかなったものである」と言い切る。人間の悟性（Verstand）は「常に明晰であり確実であることを希うものであるが、しかしその反面われわれの精神はまたしばしば不確実さに惹かれるものを感ずることも事実である」。クラウゼヴィッツはあくまで現実の現象としての戦争を研究しているのであって、その途上で純粋に論理的に思考することはあるものの、それが「哲学的研究と論理的推論の小径に分け入る」ことにここでも注意を払う。

理論が（略）いたずらに絶対的観念上の推論や法則をのみ弄んでいるとすれば、もはやそのような理論は現実的闘争には何の役にも立たないものとなろう。理論というものは人間的なものを十分顧慮すべきものであり、勇気、大胆、いや無謀というべきものをさえ顧慮しなければならないのである。兵学は生きた精神的諸力を取り扱うものであるが故に、絶対的なもの確実なものに到達し得るはずのものではない。

ここでいう「人間的なもの」とは何か。その際たるものを二つ挙げ、「勇気と自信とは戦争にとってまったく本質的な原理である」と言い切る。これではあまりに通俗的に響くと考えたのであろうか。続く節は一転し

て、「23　しかしながら戦争は常に真面目な目的に対する真面目な手段である。戦争の一層詳細な規定について」と、再び政治との関係に立ち戻るとともに、目的と手段という概念を導入しての哲学的な考察へと筆を進める。

一共同社会の、つまり全国民を挙げての戦争、それも特に文明国民の戦争は常に政治状態から出発し、政治的動機によってのみ勃発する。それ故戦争とは一つの政治的行動にほかならない。

こうして、かの定式が導き出される。「24　戦争とは他の手段をもってする政治の継続にほかならない」。続く「25　戦争の種類は数多くあるということ」では、見かけ上の違いにもかかわらず、戦争は政治的なものであり、さらには戦争と政治との関係も決して一筋縄でいくものではなく、戦争における「政治的色彩」の多彩さが示される。しかし、いずれにしても、「26　戦争には数多くの種類があるが、それらはおしなべて政治的行動として見なされ得る」ことを念押している。「戦争のうちには政治が背後に退いているものもあれば、政治がはっきりと前面に現われているものもある」が、そうした見かけ上の相違にもかかわらず、いずれの場合も「戦争が政治的であることに変りはない」。

「27　以上の議論から戦史を理解し、兵学理論を基礎づけるための観点が得られる」では、次の二点が挙げられている。

その一つは、いかなる状況下にあっても戦争は独立したものとして見なされるべきものではなく、あくまでも一つの政治的手段として見なされるべきものであるということである。かように考えて初めて、わ

れわれは全戦争史を矛盾なく見つめることができるのである。第二に、戦争は、これを惹き起す動機と状況とによって非常に異なってくるということである。

これがクラウゼヴィッツの辿り着いた「戦争研究の基礎となる根本的視点」である。この章の最後に、「28兵学理論のための結語」において、きわめて重要な指摘をしている。戦争は「具体的局面に応じてその性質を変えるカメレオンのようなものである」が、それにとどまらず、戦争という「現象全体を通して支配的な諸傾向」が観察されるという。それは、戦争には三つの傾向があり、「一種奇妙な三位一体をなしている」というのである。

一つに盲目的自然衝動と見なし得る憎悪・敵愾心といった本来的激烈性、二つに戦争を自由な精神活動たらしめる蓋然性・偶然性といった賭の要素、三つに戦争を完全な悟性の所産たらしめる政治的道具としての第二次的性質

この三つの側面がそれである。そして、それぞれ、「第一のものは主として国民に、第二のものは主として最高司令官とその軍隊に、第三のものは主として政府にそれぞれ属している」という。戦争に先立って国民の間には「激情」が醸成されていなければならず、軍隊と司令官には「偶然という蓋然性の領域において、勇気と才能」が求められ、そして、「政治的目的は政府にのみ所属するものである」。

以上が『戦争論』第一部第一章の概要である。

二十三　橋爪大三郎の『戦争論』読解

クラウゼヴィッツの考える戦争とは何か、クラウゼヴィッツが辿り着いたその結論とは何であったのか。それを考察する前に、社会学者、橋爪大三郎の『戦争の社会学』を見ておきたい。[2] それは以下のような書き出しから始まる。

軍について知ろう。
戦争について学ぼう。
軍というものがあって、戦争をする。有史以来、人類は戦争を続けてきた。それがこの世界の現実である。現実から目を背けてはならない。[3]

まったく同感である。その通りである。橋爪が勤務先の大学で「戦争社会学」という名の講義を始めることとなった問題意識がここにはっきりと打ち出されている。続けて言う。

平和を求めるなら、戦争について知らなくてはならない。戦争とはどのようなことか。戦争はどのように起こるのかわからないで、平和を実現することができるだろうか。[4]

この問いには「できない」と答えるべきであろう。戦争について深く理解することなく平和を実現することは著しく困難というより、やはり「できない」とはっきり言うべきであろう。誤解のないように断っておくな

どと言うまでもなく、戦争の現実から目を背けないというのは、必ずしも戦争を肯定するという意味ではない。「思考停止」に陥らず、「平和を求め」て「説得力のある議論」をするためには、戦争や軍についてよく知ることから始めなければならないと橋爪は主張する。ただし、これは一般論である。では、日本についてはどうか。

> 戦前には、軍があった。軍は、国民のためではなく天皇のため、いや、天皇のためと言いながら実は軍自身のために、存在した。人びとは軍について、十分な議論ができなかった。だから、愚かな戦争を、止めることができなかった。戦後は、軍がなくなった。でもやっぱり、戦争と軍について十分な議論ができていない。それなら、戦争や軍の本質が分かっていないという点で、戦前も戦後も変わりがないではないか。[5]

まったくその通りである。戦前の日本、すなわち大日本帝国と名乗ったあの国では、戦争に関するすべてを軍が独占し、一般の人びとは――軍は軍以外の一般社会を「地方」と呼んだ。かの国では軍は自らを国の「中央」だと思い込んでいたから――何も知らず、知らされず、知識人も含めて戦争についてまったくの無知であった。橋爪が「戦争社会学」の講義を十年も続け、それを一冊の本に結実させたのは、戦後も――日本国となった今も――この国が変わっていないことに対する危機感である。この国に生まれ育ったにもかかわらず、あの国を思慕する人びとがいる。父でなく祖父の跡を継ごうとする政治家もいる。「戦後日本が思考停止を脱して、おとなの議論ができるようになる」ことを願って、橋爪は『戦争の社会学』を書いた。僭越ながら、私も橋爪と同じ思いで本稿を書いている。そこで、橋爪がクラウゼヴィッツ『戦争論』をどのように読み、解し、講じたのかをここで見ておきたい。

「序章　戦争とはなにか」から始まり、「第一二章　テロと未来の戦争」まで、幅広く戦争を講じている橋爪は、第六章において「クラウゼヴィッツの戦争論」を取り上げている。『戦争論』を「戦争について科学的、体系的に論述した、ほぼ唯一の書物」として高く評価しつつ、順を追って解説している。[6] しかし、残念なことに、早くも戦争の定義をめぐって混乱している。第一部第一章においてクラウゼヴィッツ自身が定義と呼んだ「戦争とは、相手をわれわれの意志に従わせるための、暴力行為である」という命題を「戦争の定義」としつつも、「戦争とは他の手段による政治の継続である」というかの命題――本稿では、すでに述べたように、アロンにならって「定式」と呼んでいる――もまた「戦争の定義」であるとしている。これでは戦争の定義が二つあることになる。すでに言及した幾人かの論者と同じく、クラウゼヴィッツの戦争の定義について理解しているとは言い難い。ただし、橋爪は、「政治と戦争との関係は、戦争を包むもうひと回り大きな文脈を明らかにするもの」と付記している。[7] しかし、それでも定義の混乱は免れるわけではない。なぜ、このような不十分な理解を示すことになったのか。それは政治と戦争との関係についての理解が十分でないからであろう。

政治と戦争は、連関している。しかし、戦争はいったん開始されると、独自の法則性で運動し始める。

《…（略）…。》ゆえに、戦争の科学的研究（戦争論）が可能になるのだ。[8]

ここで略した部分には『戦争論』からの次の引用が入る。「政治によって喚起された瞬間から、戦争は政治からまったく独立したもの、政治を押し退けるもの、そしてひたすらそれ自身の法則のみに従うものとなる…」。そのようにクラウゼヴィッツが書いていることは確かである。しかし、橋爪の理解でいいのか。橋爪が引用しているこの部分をもう少し前後を含めて読んでみよう。

一共同社会の、つまり全国民を挙げての戦争、それも特に文明国民の戦争は常に政治状態から出発し、政治的動機によってのみ勃発する。それ故戦争とは一つの政治的行動にほかならない。ところでわれわれが先に戦争を純粋概念から演繹しておかねばならなかったように、戦争が暴力の完全な、堅固な、絶対的な表現であると仮定すれば、政治によって喚起された瞬間から、戦争は政治からまったく独立したもの、政治を押し退けるもの、そしてひたすらそれ自身の法則のみに従うものとなるであろう。例えて言えば、それはあたかも一度点火された地雷群が前もって予定されていた方向以外には誘爆し得ないのと似ていることになる。これまで政治と戦争遂行との間の調和が欠けていたために、理論的に両者を区別して考えるというのが一般の人々の実際の考え方であった。しかし事実はそうではないのであって、そのように考えることは根本的に誤りなのである。(9)

ここでクラウゼヴィッツは、橋爪のような理解を否定しているのではなかろうか。戦争が始まると政治が終わり、その後は戦争自体の法則性に支配されるものとするのは、戦争の純粋概念から演繹的にのみ考えて得られるものであるが、そのように考えてはならないとクラウゼヴィッツは言っている。「仮定すれば」そうなるという記述を読むのに、その「仮定」の意味するところを無視してはならない。政治と戦争との関係に関する多くの人の考えについて、クラウゼヴィッツは「事実はそうではない」と明確に否定していることも読み飛ばしてはならない。この段落に続く数行では現実の戦争について述べているが、その部分は省略するとして、その段落の最後の部分を読んでみよう。

われわれは、戦争とは政治的目的から出発するものである、と考えたわけであるが、戦争を惹起せしめ

るこの最初の動機が同時に戦争遂行上最高に重要なものとなるのはまた当然のことである。さりとて政治的目的が専制的立法者になり得るというわけではない。政治的目的はあくまでも手段の性質に従わねばならず、しばしばそれによってまったく相貌を新たにせねばならぬことさえあり得る。だがいずれにせよ、それは第一に考慮されねばならないものであることに変りはない。したがって政治は全軍事行動を貫徹し、戦争における爆発力という性質が許す限り、この軍事行動に絶えず影響を与え続けるものである。[10]

どうであろうか。やはり橋爪の理解は、クラウゼヴィッツをまったく転倒させているではないか。クラウゼヴィッツが否定した概念からの演繹を橋爪は、現実の政治と戦争との関係だと完全に誤解している。橋爪は「政治が機能不全に陥ったとき、暴力によって片方の意志を相手に押しつけ、現実をつくり出す戦争が駆動される。言論と暴力が切り換わるこの関係を、クラウゼヴィッツはみごとに掴み出している」と理解しているが、[11]実際には正反対である。先に紹介したリデルハートの殲滅戦争論と同じく、これもクラウゼヴィッツに対する誤解の典型例のひとつといえよう。

クラウゼヴィッツが辿り着いた結論は、戦争には終始一貫、政治がついてまわる、政治が戦争を貫いているというものであった。どのような戦争であろうとも、どのように戦争が進もうとも終わろうとも、政治は決して終わらない。戦争は政治そのものである、そうクラウゼヴィッツは言っているのでなかろうか。アロンも、戦争はもはや自律的なものではなく、政治全体の一部としてクラウゼヴィッツは捉えるようになったとしている。[12]クラウゼヴィッツはここで「政治は全軍事行動を貫徹」すると述べた後、次の節に移る。それが第一部第一章第二十四節「戦争とは他の手段を持ってする政治の継続にほかならない」である。「政治の継続」テーゼの検討に入る前に、クラウゼヴィッツの考える戦争とは何なのかを第一部第一章に基づいて整理しておきたい。

二十四　「戦争とは何であるか？」

まずは戦争の定義であるが、繰り返しになるが、「敵をしてわれらの意志に屈服せしめることを目的とする暴力行為」である。しかし、戦争と呼ぶ場合、その主体はいかなる者同士であってもいいわけではなく、国家同士であることが実際上の前提となっている。当時の国家は、すでに領域国家、主権国家化してはいるものの、革命後のフランスのような国民国家化はまだその途上にあるといわなければならない。ハイネが嘆きつつも期待したようには、まだプロイセンを含むドイツでは、国民国家とは呼べない状態にあった。ただし、こうしたことをクラウゼヴィッツ自身が明確に述べているわけではない。

敵にわが方の意志を押しつけるための暴力は、どのように行使されるのかというと、理論上は無制限となる。なぜならば、相手側が抵抗し、それに対してさらに攻撃を加え、さらなる反撃を招くことで、相互に暴力の度合いは増すことになる。その相互作用そのものの内部には、それを制限したり、限界を定めたりする論理は内蔵されていない。したがって論理的にのみ考えるならば、それは「無制限」となるわけである。しかし、これはあくまで概念上の話であって、つまり、カントが理性の働きをどこまでも延長していくのと同じである。クラウゼヴィッツが無制限の暴力行使を奨励しているということではく、戦史研究の結論としてそのように述べているわけでもない。現実の戦争はそのように無制限に行われるわけではなく、修正がなされることになる。理屈の上だけで進めていった考察をクラウゼヴィッツは「戦争の純粋概念」と呼び、現実の戦争との区別を図った。現実の戦争では暴力は無制限に行使されることはほとんどなく、したがってその極限点にまで至ることはない。なぜならば、現実の戦争は「孤立した行動」ではないからである。その鍵を握るのが政治である。絶対的なものに至らない現実の戦争を支配するのは蓋然性である。現実の戦争においては、必然ではなく偶然

――可能ではあるが必然ではない――が大きくものをいう。そうした蓋然性に左右される戦争の本質は政治である。繰り返すが、政治が目的であり、戦争はその手段である。ここでかの定式、すなわち、「戦争とは他の手段をもってする政治の継続にほかならない」に逢着するわけである。戦争にはさまざまな目的があり、さまざまな種類の戦争があり得るが「それらはおしなべて政治行動と見なされ得る」のである。さらにクラウゼヴィッツの考察はその先に進み、戦争の持つ三つの傾向ないし側面、すなわち、「本来的激烈性」、「賭の要素」、「政治的道具」を浮かび上がらせる。この三側面はそれぞれ、国民、最高司令官とその軍隊、政府に属するものとされる。

クラウゼヴィッツは長い研究の果てに、戦争をこのようなものと理解するに至った。これが戦争とは何かという問いについてのクラウゼヴィッツの到達点である。

先に紹介した橋爪大三郎の『戦争の社会学』は、冒頭に戦争と政治との関係の把握において躓いたものの、第一部にとどまらず、順を追って『戦争論』の概要を紹介している。第二部「戦争の理論について」以下、「戦略一般について」、「戦闘」、「戦闘力」、「防禦」と筆を進めた後、「第七部は攻撃を、第八部は作戦計画を、論ずる。ただし、第六部までに比べてもさらに未完成な草稿となっている」として、第七部については簡単な紹介にとどめ、第八部についての言及はほとんどないまま、『戦争論』の性格を次のようにまとめている。

『戦争論』を貫くのは、戦争を科学的に解明する、物理学のような合理精神だ。(13)

先に紹介した誤解とこの部分とを結びつけると、クラウゼヴィッツが目指したのは「物理学のような」戦争論だと誤解される恐れがありそうである。橋爪はそう考えたのであろうが、そうではない。それをここではっ

きりさせておく必要がある。

第二部「戦争の理論について」の第一章は「兵学の区分」となっているが、清水が「兵学」と訳しているのは原文ではKriegskunstである。そして第三章「兵術あるいは兵学」では、戦争の理論とはKriegskunstなのか、それともKriegswissenschaftなのかと問い、「用語はまだ一定していない」としながらも、クラウゼヴィッツはKriegskunstに軍配を挙げている。つまり、科学（Wissenschaft, science）というよりむしろ術（Kunst、art）と呼ぶのが相応しいというのである。クラウゼヴィッツは科学的な思考の重要性を認めつつも、戦争の理論を狭義の――物理学や幾何学のようなという意味での――科学に閉じ込めてはならないということを繰り返し強調している。第一部第三章で「天才」の意義を詳細に論じ、また随所で精神の重要性を述べ、国民精神にも言及しているのも、こうした認識と軌を一にするものといえよう。

第八部「作戦計画」（Kriegsplan）は確かに完成には至っていない。しかしながら、戦争が政治の継続であるという「定式」に到達したクラウゼヴィッツにとって、この第八部の意義は、その表題から想像されるような狭義の「作戦計画」、つまり軍による部隊の運用や戦闘の計画にとどまるものではない。その第九章は「敵の打倒を目標とする作戦計画」となっているが、第二章「絶対的戦争と現実の戦争」や第六章「戦争と政治」など、政治との関連において軽視できないどころか、きわめて重要な内容を含んでいる。一八二七年以降の思想の発展による修正を経ていない点を考慮に入れつつも、第一部、第二部との連関においてこの第八部は慎重に読み解いていかなければならない。

二十五　リデルハートの亡霊への引導

ここで、リデルハートが生み、その後、世界に広まってしまったクラウゼヴィッツ『戦争論』に対する根本的な誤解を最終的に解いておきたい。つまり、亡霊に引導を渡しておく。賢明な亡霊であるならばすでに諦めて往生しているはずであるが、そうではない可能性が考えられるため、ここできっぱりととどめを刺しておくことにする。本稿の第九節「リデルハートの『亡霊』」で紹介した通り、リデルハートはクラウゼヴィッツを「絶対戦争」を広めた張本人であり、第一次世界大戦の凄惨さの責任の一端はクラウゼヴィッツにあると難詰した。これにはまったく根拠がなく、そもそもリデルハートはクラウゼヴィッツ『戦争論』を理解していないことは本稿第二十二節「『戦争論』第一部第一章」で明らかにしたが、その要点を改めて整理しておこう。

戦争は敵を屈服させてこちらの意志を押しつける暴力行為と定義されるが、相手の意志を押しつけられることを拒もうとすれば、こちらの暴力行使の水準を上げなければならず、そこに生まれる相互作用は、概念上は無制限なものになるという相互作用が戦争には働く。実際の戦争はどうか。確かに、科学技術の発達した近代国家同士の戦争は、特にフランス革命以降ますますその規模が大きくなっている。しかし、現実の戦争が残忍で破壊的になるのは、「国家の内部および国家相互間の社会的状況に由来している」とクラウゼヴィッツは述べている。さらに、敵を打倒しないかぎり、敵を恐れなていなければならないが故に、「私の行動は敵によって惹き起こされる」のが第二の相互作用として働く。さらに、敵の意志は測定しがたく、そのために「相互に対立しつつ登りつめてゆく」という相互作用も働く。こうした三つの相互作用の結果、戦争はとどまることを知らず、無制限なものになっていく。しかし、これは「人間悟性が単なる概念上の抽象的世界にとどまっている限り、無制限なものに至らずしてとどまるものではない」と、あくまで概念上のことである。こうした思考

の過程は、カントの純粋理性の働きを思い起こさせるものがある。やはり、クラウゼヴィッツはカントのように「理性」（Vernunft）の作用を働かせてみたのではあるまいか。

しかし、クラウゼヴィッツ『戦争論』の真骨頂はここからである。人間悟性が概念上の抽象的世界にとどまっているとしても――ここでの「悟性」は原文ではVerstandである――現実の戦争は人間の生み出した概念とその純粋理性の働きのとおりに進むわけではない。「現実における修正」が待ち構えている。戦争の目標と手段を戦争の純粋概念から演繹すれば、不断の相互作用により極限に至るが、これは「観念の遊戯」であり、「机上の空論」であるとして、クラウゼヴィッツはきっぱりと斥けている。現実には起こり得ないのである。クラウゼヴィッツは、戦争が極限点にまで達する――「概念上の抽象的世界」ではなく現実の世界において――ための条件を三つ挙げ、それをすべて否定している。まず、「戦争は孤立した行動ではない」。たとえ表面上は見えにくくとも、戦争には政治が貫徹しているということである。また、戦争は「ただ一回限りの決戦ではない」ことから、「観念的世界でだけ無制限なものへ向かおうとする努力に対して緩和作用」が働く。さらに、ひとつの戦争の勝敗は絶対的なものではないことも「力の緊張とその激烈さとを緩和する」ことにつながる。こうして、概念上の抽象的な戦争は無制限な絶対性を持ち得るが、現実の戦争は「蓋然性の法則」に基づくものとなる。そこで、「政治的目的が再び立ち現れる」のである。力を無制限に発揮する法則が弛緩し、敵の抵抗力を粉砕する意図が戦争の目標から遠のくことで戦争の政治的目的があらためて登場する。戦争は終始、政治に貫かれており、絶対戦争の概念はクラウゼヴィッツが戦争についての思索を深めるための仮説として観念上に仮置きした概念に過ぎない。

カントは、理性の働きはとどまるところを知らず暴走することを批判したが、クラウゼヴィッツはその忠告に従ったのか、理念だけによる抽象世界に踏み込むことへの慎重姿勢を保ち、決してそこへ深入りすることな

く、あくまで現実世界に踏みとどまって戦争の論理を追究した。

以上のことは、第一部第一章を丁寧に――クラウゼヴィッツについての背景的知識がその読解を大いに助けることはすでに示した通りであるが――読みさえすれば、容易に理解できることである。リデルハートはこの最も重要な部分さえも理解していなかった。リデルハートの亡霊の居場所は、もはやこの世にはない。これだけ説明すれば、さしもの亡霊も諦めがつき、迷わず往生するに違いない。

二十六　「戦争は他の手段による政治の継続」（二）

リデルハートの亡霊は往生したが、そもそも、あのような亡霊を生み出した誤解がどこから生まれるのか。概念上の抽象的な戦争と現実の戦争とを分ける最大の要素は、戦争そのものの中にあるわけではない。それは政治である。戦争の目的が政治なら、戦争を始めるのも、戦争を動かし続けるのも、終結させるのも政治である。そうなると、有名な「戦争は他の手段による政治の継続」という定式についての正しい理解が必要となる。ここであらためてこの定式について考えてみよう。

まずは、「政治」という言葉がここで何を意味しているのかから考えてみよう。そもそも、ここでいう「政治」（Politik）とはpoliticsなのか、それともpolicyなのか。ドイツ語では「政治」も「政策」も同じPolitikで表されるため、どちらを意味しているのか、判然としないことが少なくない。アロンもこの点を指摘している。Politikの二つの意味、すなわち政治（politics）と政策（policy）について、クラウゼヴィッツは明確に規定したことはないというのがアロンの分析であった[14]。清水と篠田はともに、ほとんど「政治」と訳しているのに対し、ハワードとパレットは場合によって訳し分けている。「政治」では漠然としすぎているのに対し、「政策」

では狭すぎるように感じることもある。「政策の道具」としてしまうと、対外政策の手段――話し合いがまとまらないので、代わりに武力で決着をつけるというような――として狭くなり過ぎる感を否めない。

第二十四節において、クラウゼヴィッツは次のように述べている。

> 戦争は単に一つの政治的行動であるのみならず、実にまた一つの政治的手段でもあり、政治的交渉の継続であり、他の手段による政治的交渉の継続にほかならない[15]

ここで明確に示されているのは、政治が目的であり、戦争はその手段であるということである。それでも、ことはそう簡単ではない。これではまだ、政治と政策の問題は解決しない。第二十六節「戦争には数多くの種類があるが、それらはおしなべて政治的行動として見なされ得る」において、「戦争のうちには政治が背後に退いているものもあれば、政治がはっきりと前面に現われているものもある」として、その本質を見誤る可能性を示唆している。そして、続けて言う。「しかしそのいずれにせよ、戦争が政治的であることに変りはない」。さらに、この節の最後は、「政治が前面に現われている戦争を人々は一層政治らしいと思いこむのである[16]」。逆に言えば、政治が前面に現われていなくても、戦争は政治の継続であるということである。こうして、クラウゼヴィッツは次のような結論を提示する。

> いかなる状況下にあっても戦争は独立したものとして見なされるべきものではなく、あくまでの一つの政治的手段として見なされるべきものである[17]

やはり、Politikをあまり狭く「政策」に限定すべきではなかろう。「政治的手段」とは、政府の手の内にあり、政府が自由に使える文字通りの道具というだけの意味ではない。客観的に見て手段の位置にあり、その本質において手段の役目を果たすものであり、それ自体が独立した存在ではないという意味と考えるべきであろう。

戦争において、小さな目的――一つの戦場における勝利のような――は、より大きな目的――たとえば、ある地域の占領というような――にとっては手段に過ぎず、その大きな目的は、さらに大きな目的――敵部隊の殲滅――にとってはやはり手段なのである。それもさらに大きな目的――敵国政府の降伏――からすればこれもまた手段に過ぎないといった具合に、目的と手段とを弁証法のように上昇していくと、これ以上は上昇しようのない地点に辿り着く。それが最終的な政治的目的となる。

注

（1）『戦争論』からの引用は清水訳（現代思潮社）による。ただし、原著第十八版（Dümmler, 1991）を確認の上で訳文に修正を加えることもある。

（2）橋爪大三郎『戦争の社会学――はじめての軍事・戦争入門』（光文社、二〇一六年）。

（3）同前、三ページ。

（4）同前。

（5）同前、六ページ。

（6）同前、一二七ページ。巻末の参考文献欄によれば、本稿と同じく清水訳・現代思潮社版が挙げられている。ただし、引用は中公文庫版（中央公論新社、二〇〇一年）からである。

（7）橋爪『戦争の社会学』、一三二ページ。

（8）同前、一三四ページ。

（9）『戦争論』上巻、四二ページ。
（10）同前、四三ページ。
（11）橋爪『戦争の社会学』、一三五ページ。
（12）アロン『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』。
（13）橋爪『戦争の社会学』、一五七ページ。
（14）アロン『戦争を考える――クラウゼヴィッツとその時代』、一四五ページ。
（15）『戦争論』上巻、四三ページ。
（16）同前、四五ページ。
（17）同前。